

視察用

様式(細則 5-2)

平成 28 年 8 月 24 日

浜田市議会議長 西田 清久 様

議員名 柳楽 真智子



## 調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1、期 間 平成 28 年 7 月 25 日 ～ 7 月 27 日

2、視察地

○和歌山県東牟婁郡那智勝浦町 (色川地区)

○高知県高岡郡津野町 (床鍋地区)

3、調査経費 41,762 円

レンタカー代	12,750 円	ガソリン代	3,867 円
高速料金	8,680 円	宿泊費	16,290 円
駐車料金	175 円		

4、調査研究活動の概要

別紙のとおり



## 【 那智勝浦町色川地区 】

### ◆ 活性化と移住・交流促進の取組みについて

色川地区は「那智の滝」の西方に位置する棚田の美しい地域である。9つの地区があり、1950年頃には約3,000人の人口を有し、鉱山と林業の村として活気に満ちていた。ところが、1965年頃から林業不振や鉱山の閉鎖により人口が急激に減少し、一気に過疎化・高齢化が進んでいった。しかし、1977年に都会から有機農業を志す5家族が色川地区に来られ、「耕人舎」を設立したことがきっかけとなり移住者の受入れが始まった。今では集落全体の約45%が移住者の方となっている。

### 【 取組内容 】

- 色川地区9集落の区長連合会の下に、「色川地域振興推進委員会」を設立し、定住受入れの窓口として機能を促進している。
- 受入れにあたり推進委員会が、事前に農業体験等を通じて、15人の地域住民と移住希望者が面談する機会を用意する。地域住民が、地域の存続のために移住者を受け入れるという、共通認識を持って取り組んでいる。
- 旧小学校を改修して町が整備した、定住・体験交流拠点「籠ふるさと塾」（家族用2世帯、単身用4世帯が滞在可）を活用して、体験交流プログラム、定住促進プログラムを実施している。

### 【 活動の成果 】

- 平成27年4月時点で、移住者は73世帯、168人となっており、人口の45%を占めている。
- 区長・委員会・消防団・青年会などの地域組織や活動に参加・協力してくれている。
- 保育所・小中学校の存続。平成28年の夏には小中合同の校舎が新築される。
- 棚田などの伝統的な景観の保全ができる。
- 伝統文化の継承。
- 有機農業や農産加工品による産業振興が進んできた。

### 【 課題と取組み 】

- 移住者への住宅・農地の確保

先祖代々の家を他人に提供することへの抵抗感や、宅地・農地整備の地理的困難を克服するために、地元住民が「世話人」として、持ち主と定期的に連絡・交渉を行う。

○ 産業振興・雇用の確保

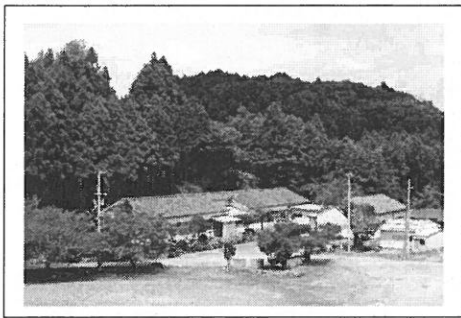
有機農産物の高付加価値化と、色川産品のブランド確立・販路拡大のために、新製品の開発、イベントでの色川産品販売、ホームページなどを使った広報促進を行う。

【 感想 】

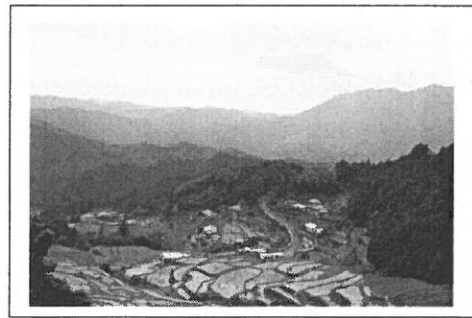
40年も前から地域の存続に危機感を持って、定住対策に取り組んでこられたことに驚きました。初めは地元住民の中でも、よそ者が入ってくることや、よそ者の力を借りることに抵抗感を持つ人もおられたようですが、粘り強く進めてこられました。天空の里と表現したくなるほど細い山道を登り、買い物に行くにも大変であろうと心配するくらいの集落に、若い人の姿があり、そのほとんどが移住者であることが、色川地区の取組みの素晴らしさを物語っていると思います。移住者を呼ぶために、地域を無理に変えたりすれば、地元住民に不満が出て来るので、ありのままの色川地区を体験してもらい、ここで暮らすことを決意できる人に来てもらうのが良いと考えておられました。

浜田市でも学校の統廃合が行われているのに、色川には保育所もあり、小中学校合同の校舎が建設されている光景を目の当たりにして、恵まれた環境でなくても人は集まるのだと実感しました。

この取組みは住民主導が原則で、行政はバックアップに回ってもらう方が成功すると言われ、地域の人々の熱意が成功のカギなのだと感じました。



「 籠ふるさと塾 」



「 棚田 」

【 津野町床鍋地区 】

◆廃校舎「森の巣箱」を活用した、住民主体による集落活性化について

津野町は、高知県の中西部に位置する町で、平成17年に葉山村と東津野村の2村が合併して津野町となった。面積の90%が山林に覆われ、四万十川の源流を有する自然豊かな町である。床鍋地区は津野町でありながら、役場に行くには隣の須崎市を迂回して、

車で40分ほどかかる「陸の孤島」であった。かつては山景気に沸き、小中学校も存在する活気のある地域だったが、時代とともに過疎化・高齢化が進み、集落機能の維持が危ぶまれる状態となった。「このままでは集落が消滅してしまう。地域の活性化に取り組みたいが何から始めればいいのか分からないので、行政支援ができないか」町に申し入れを行った。この時行政は、「主人公は集落であり、集落全体が汗をかくこと。責任は集落全体で持ち、行政はサポートに徹する」という条件を提示し、合意に基づいて、集落と行政の二人三脚による集落活性化がスタートした。

## 【 取組内容 】

### \*集落再生

- 平成7年「床鍋をなんとかせないかん」という15名の有志によって、「床鍋地区開発検討会」を発足。行政にアドバイスや支援を要請した。
- 「支障林を伐採して集落を明るくせんと、こんな暗い地区に人は入ってこんぞ」との声が上がり、所有者との交渉から伐採まで、すべて集落の手で行ったことで、「自分たちでできる」という自信が芽生えた。
- 平成12年「床鍋とことん会」を発足して、ワークショップでとことん意見を出し合い、「集落再生パイロット事業」を導入して、住民主体の再生プランを策定。
- 昭和59年に廃校となった旧床鍋小学校を、高知県や旧葉山村が改修し、平成15年4月に農村交流施設「森の巣箱」がオープンした。
- 住民と役場職員が話し合い、生活を維持するコンビニ、交流の場となる居酒屋、帰省した家族が滞在できる宿泊部屋を構えた。
- 当面の運転資金400万円は、1世帯・10万円を出資して、コンビニの利用も世帯ごとに購入金額を設定し支え合いの仕組みを確立させた。
- 季節に応じて、ホテルまつりや野外テラス森のビヤガーデン、床鍋夏祭り・ライブ&野外映画上映など企画。
- 森の巣箱での交流をきっかけに5組のカップルが誕生し、やまがらホールで結婚式・披露宴を行っている。
- 運営は補助金無しの集落経営で行うので、縛りが無く自由に取り組んでいる。
- 年間600~1,000名の宿泊があり、合宿でも利用されている。

### \*集落福祉

- 人口減少と高齢化の進行に不安を感じ、独自の集落調査を実施。地区長・集落福祉委員・社協・県職員・民生委員・法政大学実習生でチームを組み、高齢者宅等を訪問して聞き取り調査を行った。
- 聞き取り調査の結果をふまえて、地域で何ができるかを検討した結果、「床鍋地区アクションプラン」を策定し、住民に説明した。
- 地域の繋がりを活かした防災と助け合いの地域づくりと、一人一人の不安を解消できる環境づくりに取り組むため、持病や血液型、家族構成。緊急連絡先・かか

りつけ医などを記載した「お守りカード」を全戸配置し、さらに班ごとの一次避難所も記載されている。お守りカードの控えが「森の巣箱」でも保管されている。

- 集落一斉の避難訓練や消火訓練も多くの住民が参加して行っている。
- J Aに相談して高齢者がいつまでも元気に働き続けられるように、集会所をシシトウの選果場にして選別やパック詰めを高齢者が行い、「床鍋式デイサービス」として交流の場にもなっている。

## 【感想】

危機感を住民が共有して解決方法を話し合い、みんなが協力して取り組むことの大切さを強く感じました。補助金をもらわないことで、「自分たちの責任で成功させなくては」という自覚も生まれ、責任を誰かに求めることもできない状況が、床鍋地区の取り組みの成功に繋がったと思います。

浜田市でも人口減少と高齢化は進んでおり、財政的にも今後厳しくなっていく中で、補助金のあり方や行政支援のあり方などの参考になると考えます。

